

# SEMINAR HOUSE NEWS

## セミナー・ハウス

No.141  
1996.5.25

＝巻頭言＝

教職の専門性とその準備のための教育

■第167回大学共同セミナー  
民主化の比較政治学

■第10回大学教員研修プログラム  
単位制度の空洞化に挑む

■第22回国際学生セミナー  
アジア・太平洋地域の行方  
—そのシナリオを考える—

■第32回大学教員懇談会  
学問への動機づけはいかにあるべきか



Plain living and high thinking

財団法人 大学セミナー・ハウス  
INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSE, INC.

# 教職の専門性とその準備のための教育

東京学芸大学教育学部教授 深谷和子

教育学部はいくまでもなく子どもに教えるかという教える学部です。そのため小・中・高等学校と、それぞれの課程に分かれて構成されていて、そこに課程制大学といわれる教育学部の特色があります。ここでは、その中でも唯一他学部で教員免許の取得が開放されていない初等教育課程の問題に焦点を絞って話します。

終戦直後にアメリカは日本の各県にリベラル・アーツ・カレッジを設置しようとした。師範学校がその受け皿となつて、「学芸」という名前の下に教師を育てる教育を考えていたようです。従つて、戦後の教育学部または大学は全て学芸学部、学芸大学として出発しました。

しかし、東京大学の教養学部と国際基督教大学が一応の成功例といわれていますが、日本ではリベラル・アーツ・カレッジは定着しなかつたようです。そのため「学芸」は次々に「教育」に改名され、今や学芸大学として現存するのは東京学芸大学だけになりました。

## ●教育学部の現状

かつて教育学部の卒業生は、ほとんどが教員になりました。教育学部は、現在でも原則として教員免許を取らなければ卒業できません。ところが、最近では少子化にともなつて教員の必要数が減り、教員免許を取つても半分位しか採用試験に合格できません。そうした状況の下で教育学部の目的大学としての性格は少しずつ変わってきています。総合課程などと称して教員免許を取らなくても卒業で

②

きるコースが各大学にできています。

また入学時からすでに教員を志望していない学生が増えていて、ある調査によると平成6年度の千葉大学教育学部の新入生では教員志望が57%とできています。そういう状況ですから文部省に教育学部のリストラをする意向がある、とも聞きます。

そこで教育学部を取り巻く現状を踏まえれば、卒業生を教育現場に送り出すためだけに従来通りの教育内容では、教育学部が置かれている現実に対応できなくなつてきていると思えます。

## ●教育実習による動機づけ

教育学部を出ても教員になれないということは、学生の教職への動機づけに関わる大きな問題です。一般に企業などでは新入社員の実務研修を入社後にします。しかし、教員の場合は赴任した最初の日から担任を持つので、教育学部はカリキュラムの中で実務の基礎教育を行ないます。つまり教育実習です。それが教育学部と他学部の大きく異なる特徴です。

教育実習は教授方法を実際に学ぶプログラムなので、学部教育の中で大きな意味を持つており、3年次の事前指導から事後指導までたくさん時間を費やして行なわれています。学生は、実習を通してどのように授業を展開し、指導案を作るのかということを学習します。現在では授業のシミュレーションも定着していて、実習は教育学部にとって命といつてもよい大事な行事といえるでしょう。その教育実習を通して学生は教員への志望

を強めます。それは実習の目的ではなく副次的なものですが、とても重要な効果を持っています。他にも教員にとって児童観を作ることも重要なことで、「外で遊ばない」とか「鉛筆を持たない」といった偏ったネガティブに過ぎる児童観は実習を経て子どもたちと接することで現実には根ざしたものへと修正されます。教職に就くことの意義を見出すことで意欲が強まり、自己の適性観いわば教職に就くことの自信も高まります。

しかし、それはあくまで教員になるためだけの動機づけですから、今後もこのまま教育実習だけでよいのかどうか考える必要があると思えます。

## ●おざなりであつたテイク・ケア

ところで教育学者のベライターは、教職の専門性について、教師にはスキル・トレーニングとテイク・ケアの二つの役割があると述べています。前者は知識や技術の伝達のこと、学校の授業の本体になるものです。後者は子どもに対する動機づけや世話、つまり心を育てるといふことです。ベライターによれば前者同様に後者も教師の大事な役割であるとしています。日本の教職教育は後者をおざなりにしてきました。

教育学部ではそもそもスキル・トレーニングに徹していて、高校と同じように知識や技術を伝達する授業ばかりです。教育実習での教材の解釈とか指導案作りなどの指導のときにも教員が学生にスキル・トレーニングの機会を提供はしても、子どものテイク・ケアに



ふかや かずこ  
東京教育大学卒、教育学修士。専門は児童心理学、著書に「遊びと勉強」(中公新書)などがある。

については指導が不足しています。

また、テイク・ケアに相当する分野の授業は、教職教養科目の中に含まれており、青年心理学、児童心理学、道徳教育といった知識伝達の講義ばかりで、しかも時間数がたいへん少なく十分ではありません。教育学部にはいわばテイク・ケアを扱う心理学や教育学を専攻する学生はいても、極めて少数です。つまり、日本の教師準備教育では教わる人の心をほとんど問題にできていないということです。

スキル・トレーニング偏重の結果、日本の教育界は高度な学力水準を確保することができませんでした。しかし、同時にテイク・ケアの欠落のために児童理解とか問題行動への対応については極めて惨憺たる状態が続いています。特に最近の「いじめ」とか不登校などの問題に対する学校側の対応の悪さは、子どもたちの心を理解して対応する能力を持っていないという教員の実情を顕著に見せていると思います。

### ●テイク・ケアの臨床実習を

アメリカでは、授業参観や学校見学をしていると日本と対照的で教育技術は拙劣です。教育の技術として、たとえば20人のクラスだとすれば、その全員がある水準まで到達するのは難しい授業、なかには子どもにも学力が身につくのかさえ疑問に思う授業もあります。しかし、反対に子どもたち一人ひとりの心に働きかけていくことについては、実に見事です。日本の教員がアメリカの教員から

学ぶことはテイク・ケアの面についていえば多くあると思います。

日本の教育界の今後の課題は、教わる側である子どもへのテイク・ケアにどう対応するかです。それには教員養成の課程の中で、児童理解とかカウンセリングに関係する理論を体系的に教授することが必要です。そのためゼミやワークショップを充実させなければなりません。

私は東京学芸大学で、時間割上は正規のゼミを準備されていませんので、講義の一つをゼミ形式にして、またその他にも一つ自主ゼミを開いています。児童理解のようなテイク・ケアに相当する教育は、レクチャーだけでは学生の理解が定着しません。ゼミ形式だけでも不十分で、どうしても臨床実習が必要です。臨床心理学でいうと、クリニックのある大学では実際に学生に何らかのケースをもたせて、その問題行動の成立と治療を学ばせます。

同様に子どもの心の問題についてもクリニックに相当する機関を小学校や中学校で設ける必要があります。テイク・ケアの実習はスキル・トレーニングの実習とは異なった内容ですから、教育実習とは別に設けるべきです。たとえば臨床実習の付属小学校や協力校を持つなどして、小学校なり中学校なりの現場で実際にテイク・ケアを学び、体験できるようにすることが望ましいと思います。

### ●「人間形成学部」への転換

テイク・ケアの教育が学部カリキュラムの

中でウエイトを占めるようになれば、教育学部は、目的学部でありつつ、その性格を大きく変えることとなります。教員の外にもソーシャリゼーションに関わる職業を志望する学生であれば有意義な教育内容になります。もしも文部省が学部定員を削減する政策を打ち出す計画があっても、教育学部は削減の対象から外れることができるかもしれません。

最終的には、テイク・ケアの教育が充実していくことで従来の知識伝達型の学校教育を体質改善できるでしょう。教育界全体として、問題解決型の学校へと学校の性格を変えていく必要があります。現在の日本では、ただ知識を伝達されただけの頭の固い学生が育っています。大学の授業の中で意見を求められたときにしっかり応答できる学生は大変に少ないのです。それは小学校から高校までの学校教育の内容と形成に問題があるからだと思います。

私は毎週の自主ゼミの中で学生に自分の固有の考えを作り、自己表現力を高めるトレーニングをしています。これを2年間続けると自分で考えたことを十分に言えるようになります。私の自主ゼミは2年生以上が対象ですが、本来ならば1年生からすべきことです。教育学部の教育はしばしば高校の延長線上のスキルトレーニングばかりで、私はその無駄を痛感しています。しかし、それも本当は初等教育から変えていくものではないかと思っています。

(文責・編集者)

## よりよい大学教育の方法を求めて 単位制度の空洞化に挑む

### ▼講演

教師の教育機能をどう考えるか

大学セミナー・ハウス館長 岡 宏子氏

### ▼提題

A 単位に見合う授業を創る

亜細亜大学教養部教授 原 一雄氏

B 学生が求める授業を創る

立教大学文学部助教授 佐々木一也氏

C シラバスを創る

慶応義塾大学総合政策学部教授 井下 理氏

### 【運営委員】

国際基督教大学教養学部教授 絹川正吉氏

電気通信大学電気通信学部教授 中田良平氏

千葉大学園芸学部教授 山内正平氏

中央大学商学部教授 建部正義氏

東京女子大学文理学部教授 福田一郎氏

上智大学外国語学部教授 嶺山道雄氏

東京学芸大学教育学部教授 小林志郎氏

【参加状況】58名(46大学5短期大学、講師・運営委員は除く)

武蔵工業・立教(各2)、東京・東京医科

歯科・東京学芸・東京商船・電気通信・福

井医科・徳島・大分・愛知県立・広島県

立・北海道医療・酪農学園・目白・千葉

工業・東京歯科・青山学院・大妻女子・桜

美林・杏林・国立音楽・芝浦工業・杉野

女子・清泉女子・多摩美術・東海・東京

家政・東京工芸・東京電機・東京理科・法

が、よりよい大学教育の実施のために、カリキュラム以上に重要な意味を持つことになる。

カリキュラムを改革したからといって、教員が入れ替わるわけではないが、カリキュラム改革は真新しい洋服に手を通したときのような新鮮な気分を提供してくれる。その気分が酔いしれて自分の授業が変わったかのように錯覚することもあるかもしれないが、しかし、実際に個々の教員に求められているのは授業に対する意識改革である。

今回の大学教員研修プログラムの趣旨は、そうしたことを念頭に置き、大学教育の原点に立ち戻って、教員の役割、単位制度の意味をあらためて問い直すこと。そして、より充実した授業を展開するために、シラバスをどのように作成し、利用すればよいのか、どのように学生と協力しながら授業を組み立てていけばよいのか、という課題に取り組みことであった。

プログラムは、まず上記の通り岡氏の講演に始まり、原・佐々木・井下の三氏による提題があった後、分科会に分かれて、さらに具体的な討論を行なった。ここでは、各分科会のファシリテータのレポートをご紹介し、報告としたい。

なおこの研修会には、上記の通り北は北海道医療大学、南は大分大学まで全国各地から51校の参加が得られた。これを機会に各大学でのFD活動の活性化を期

待したい。

なお、今回はいまだにその機能がよく理解されていないシラバスの実例を持参してもらい、相互に公開し、参考に供した。シラバスの内容はもちろんのこと、形式的なフォームなども大いに参考になったとの感想が多く聞かれた。今後も過密スケジュールの中にこうした情報交換の場を設けていきたい。



より充実した授業を展開するためには、シラバスをどのように作成し、利用すればよいのか、どのように学生と協力しながら授業を組み立てていけばよいのか——体験談を交えながら講演する井下氏(大学院セミナー館にて)

## ●分科会A報告 単位換算運動の展開を!

中央大学商学部教授 建部正義

現行の「大学設置基準」第二十一条によれば、「一単位の授業科目を四十五時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とする」とされている。

すでに多くの箇所指摘されているように、これを単純に計算すると、卒業の要件として定められた「百二十四単位以上」(第三十二条)の単位を四年間で修得するためには、学生は、年間三十五週を通じて、労働者の週四十時間労働という目標を超える、週四十五時間以上の「講義及び演習」「実験、実習及び実技」を含む、なんらかの学習を義務づけられることになる。

ちなみに、こうした規定はイギリスのオックス・ブリッジに代表される学寮生活を伴うカレッジ制の模倣に由来するとの見方もある。

さて、第一分科会では、第IIセッションにおける原一雄氏の「単位に見合う授業を創る」という発題にもとづき、「大学教育と単位制」というテーマをめぐって、参加者による活発な討論が展開された。原氏は以下の点を強調される。

①そもそも、単位とは、大学教育の「質と量」を査定する基準尺度であると考えられるならば、一方で、教員相互間に良識を裏付けとする単位問題についての、

ある程度の共通認識がなければならぬと同時に、他方で、認定された単位は、全国的にも、さらに現在では、国際的にも、通用するものでなければならぬ。

②そのためには、学内において、教員の意識革命、環境整備、大学改革の推進が、また、学外からは、学会サイドの指導とガイドラインの提示が必要になる。

③「単位に見合う授業を創る」には、それぞれの大学の自己点検とやらんで、他者による評価も考慮されなければならない。

④いくぶん挑発的になるかもしれないが、「単位を評価尺度らしくする」には、単位換算運動を展開することも一案である。すなわち、学生の側からは、 $\text{全学費} \div \text{納付金} = \text{二四} \parallel \text{単位単価}$ 、 $\text{単位単価} \times \text{履修登録単位} \parallel \text{学期別授業料}$ を、教員の側からは、 $\text{担当単位} \times \alpha$  (受講者数)  $\times \beta$  (学生評価)  $\parallel$  教育業績指数を計算してみるとというのがそれである。ちなみに、私立大学についていえば、現在、単位単価は五万〜六万円に相当する。

分科会における討論の結果、次の点で、参加者の意見の一致をみた。

単位制とは便宜的なものであり必要悪にすぎない。他方、「大学設置基準」第二十一条において、単位の認定方法が弾力化された。たしかに、現行の設置基準は、すでに指摘したような矛盾をはらむものであるが、われわれとしては、むしろ、単位制に必要悪という認識にたちつつ、

「設置基準」の弾力化された部分を積極的に評価して、それを逆用することがより肝要な問題であろう。

## ●分科会B報告 いかに学生に求めさせるか

千葉大学園芸学部教授 山内正平

「学生が求める授業を創る」というテーマで提題された佐々木一也氏を含め、分科会Bグループの参加者は14名であった。

毎回の授業で学生に文章を書かせ、それを添削するのに5時間かけるという佐々木氏の授業実践に対して、言葉もないというのが参加者の共通する率直な感想ではなかったろうか。授業の準備に要する時間を加えて考えれば、その負担の大きさに驚くばかりである。参加者の中からも、学生に文章表現能力が欠ける、という指摘があった。教師がそう判断したときに、学生に対して何を行なうのか、そしてどこまでやればいいのか、ということが当然問題になる。出発点に戻って考えれば、研修会の冒頭の、教師の教育機能をどう考えるか、という点で岡館長の講演内容に密接に関わっている。

大学教育は知識を伝達するだけの場ではない。どんな人間を育てようとするのかという課題が、大学にも、個々の教員にもあるはずである。分科会では、「学生が求める授業」という本題から少し離れるが、大学の個別的な事情、および各大

学共通する問題点などが自由に語られた。

大ざっぱに言えば、教員それぞれのパーソナリティに触れることでさまざまな人間観や価値観が体得できればよい、というところに落ちついたと思うが、大学そのものの教育目的とその大学に所属する教員の役割との関係という点からの議論が不足したように感じている。

テーマとの関連で言えば、授業に対して「学生が求める」というところまで到達すれば、それは学生に批判精神が養われていることを意味するのであり、そのこと自体が現在の大学教育における大きな目標の一つであろう。

ではその「学生が求める」とは何を意味しているのか。分科会では、「求める」の意味は何か、そして方法的に求めに際するとはどのようなことか、という疑問が示された。学生に求めさせる力は知的な好奇心である、という点で参加者の共通の了解がえられたが、学生が求めたいことを前提にするか、学生は求めないという立場から授業を考えるかで、議論の筋道に相異点があったように思う。

しかし肝心な問題は、いかに学生に求めさせるか、ということである。佐々木氏の授業も、そういう意味において、学生に能動的に授業に参加させるための一つの試みである。

分科会での議論は参加者それぞれの経験から発しており、悩みや提案など一つ

一つの発言に納得することばかりであった。しかし、学生に求めさせるといふことは、佐々木氏のようないわば自己犠牲を教員に強いるものであろうか。もちろん好意的な教員の個人的努力にのみまかされてよいものではない。

そうした点も考慮して、翌日の総括討論には、教師のなすべき仕事の最低限度は何かという問題を念頭においた上で、どのように手を抜いて授業をするか、というテーマをBグループとして提出することに決め、散会した。

### ●分科会C報告

#### 電話帳シラバスからの脱却を

電気通信大学電気通信学部教授 中田良平

高校卒業生の四〇%が大学へ進学する時代になり、教育効果改善の一方法としてシラバスの導入が各大学で実施されている。しかし、シラバスの概念が紹介されて未だ日が浅く、多くの検討事項が残されている。初期のシラバスは、単に、学生に授業計画（内容）を提供することにとどまっていたが、井下理氏はシラバス配付により得られた結果を解析することにより、シラバスの内容充実、さらには教授方法の改善へと一歩踏み込んだ利用が可能となることを述べられた。井上氏を中心とする分科会では、シラバスの作成目的（授業の質的向上、授業の計画等）に基づいて、作成主体から問題までの討論があった。要約すれば以下の

通り。

①シラバスを創る主体について。作成する主体は教員でなければならない。従来のシラバスは教員一人ひとりの裁量によつて書かれていた。これ自体は問題ではない。ただ、さらに内容を質的に向上させるには、難しいことではあるが、教員間でお互いにシラバスの内容を検討し、相互にチェックすることが望ましい。次に、学生の建設的な考え、意見を何らかの方法（学期末のアンケートの形式）で積極的に取り込み、次期のシラバスの改訂や授業方法に反映されるべきである。

②シラバスのフォーマット、体裁、保管について。フォーマットの有無は大学によつて異なる。フォーマットが与えられ、記入項目が指定されていれば、記入する教員と利用する学生にとつても便利である。なお、シラバスの学生への配付は担当教官別か学科別とすることが望ましく、全体を綴じて「電話帳」にしたものは大学事務か学科事務室に具えれば十分であるとの声があった。

③シラバスの活用。教員による担当授業の自己管理が可能となる、学生にとつては授業内容はもとより予習（与えられた参考資料をあらかじめ読んで授業に出席等）に利用できる。また、興味があった他の教員の授業方法と内容が明らかにしたとの発言もあった。さらに進めて、教員間の授業公開による授業方法の検討を期待したい。

④シラバスの問題点。いまだ、日本のシラバスは過渡期にあり、今後の内容充実が望まれる。すでにシラバスの形骸化

#### 参加者の感想から

#### マンネリ化した講義から脱却するヒントが得られた

神奈川工科大学工学部教授 三澤章博

今回初めてこのプログラムに参加した。今回の講演テーマや提題の高尚さと、必修科目の講義にもかかわらず手ぶらで教室に入り、開始早々寝てしまう学生もいるという私の授業の状況を考えると、まな板の鯉にされてしまふな一と思ひながらの、恐る恐るの参加であった。

教師の教育機能についてのご講演を、学生の脳にいかにかきかけるかというお話として受け止めたが、私の抱える悩みは、それより一歩手前の、「脳にかきかける機会をどうしたら与えてもらえるのか」という問題である。学生が求める授業を創るというお話は、与えられた機会を継続的に維持するためのヒントを示してくれた。学生の考えを聞き、彼らと議論する授業が学生にとっていかに重要であるか、それをなんとか実現すれば学生の興味を喚起し、ひいては学生が自ら歩きたす機会を与えることになることを実例を持ってお教え戴いた。

同様な具体例を参加されていた他の先生からも伺うことができた。いかに個々の学生とのパイプを太くしていくか、これがわたしの課題であると認識させられた。一方、多くの学生と議論する時間をいかに確保するか、制約された時間とその労力の大変さを考えると、講義内容の吟味と小人教教育体制の整備が非

の問題が提起されている。各大学が現状、時代の流れを踏まえて、常に内容の更新を行なうことが大切である。

常に重要であるように思う。

単位認定の問題については、大学設置基準第21条の規定は「一単位は四十五時間の学修を必要とする内容をもつて構成する」といういわば時間量の規定であり、本来は質的基準であるべきではないか。またその質は国際的に通用するものなのか、あるいは他大学にも通用するものなのかどうか。単位認定は担当者個人が行なっており、その認定基準が一般性を持ちうるのかどうか。時間量の規定がすでに現実合っていないなどの指摘がなされ、日頃当然のように行なっていることの危うさを改めて認識させられた。

シラバスを創る議論では、作成したシラバスは講義する側の観点からしか検討していかつたという点で、学生にとつて利用価値の少ないいわば私自身のためのものでもなかつたという反省と、学生の役に立つシラバスを作成するという考え方に立つことの大切さ、およびより良い授業を行なうために受講した側からの意見（授業評価）を聞くことの大切さをお教え戴いた。

また、どのように作成したシラバスを実際に学生が読み、どのような態勢で授業に望むようになったかの例も伺え、大変参考になった。残された大きな問題、しかもそれは18歳人口の急激な減少に伴い、より大学に入りやすくなる時代が到来することから、私の所属する大学ではより深刻化すると思われるが、目的意識を特に持たずに入学してきた学生の動機づけをどうするかである。

先に述べたように恐る恐るの参加であったにもかかわらず、マンネリ化した講義から脱却するヒントを数多く与えて戴き、またリフレッシュする機会を与えてもらつた。

# 学問への動機づけは いかにあるべきか

## ▼講演

大学教育における動機づけ

名古屋大学大学院国際開発研究科教授

潮木守一氏

## ▼パネル・ディスカッション

1 教養教育と英語教育における動機づけ

津田塾大学学芸学部助教授 村上 健氏

2 経済学の学会動向と導入教育

福岡大学経済学部助教授 後藤康夫氏

3 教職の専門性とその準備のための教育

東京学芸大学教育学部教授 深谷和子氏

4 これからの理工系大学のあり方

山口東京理科大学基礎工学部長 田丸謙二氏

## 【運営委員】

東京学芸大学教育学部教授 小林志郎氏

東京都立大学理学部教授 八杉貞雄氏

東京工業大学工学部助教授 石川 謙氏

中央大学商学部教授 徳重昌志氏

国際基督教大学教養学部准教授

松岡信之氏

【参加状況】 47名39校（講師・運営委員を除く）

東京学芸・電気通信・東北福祉・亜細亜・武蔵工業・中部（各2）、千葉・東京工業・信州・大阪・神戸・徳島・東京都立・北

海道医療・酪農学園・青森・青山学院・大妻女子・杏林・国立音楽・工学院・芝浦工業・清泉女子・中央・東海・東京工芸・東京女子・東京理科・日本・日本女子・法政・武蔵野女子・早稲田・神奈川・神奈川工科・活水女子・鹿児島純心女子・小田原女子短期（各1）、防衛（3）

◆ 大学設置基準の改正以降、大学教育のいわば外枠である諸制度やカリキュラムの改革は着々と進行している。そこには大学教員だけでなく社会のさまざまな要求が盛り込まれているが、しかし、どんなに外枠を改めても教育の主体である学生が大学に求めていることと私たち教員が彼らに求めていることが乖離している。根本的な改革にはならないのではないか。

最近では「理工系離れ」が社会問題化しているが、必ずしも理工系学部だけの問題とは言いきれない。今日の学生は偏差教育の中で輪切りにされ、知的好奇心をそがれ、学部教育への動機づけが希薄なまま入学してくる。向学心をもっていながら、どう学んだらいいのかわからず右往左往している学生も多いのではな

いか。

その主なる理由は、彼らが知ることに喜びを体験できていないことかと思われる。どうしたら学生が学問への興味を示し、それを醸成し持続的に発展させていくことができるのか。従来のような履修方法や事務窓口の案内が中心の型通りのオリエンテーションだけでは十分とはいえない。

そこで大学や学部によってそれぞれ教育目標やカリキュラムは異なるが、学問への動機づけとオリエンテーションの実践例を紹介してもらいながら討論することが、今回のテーマである。

プログラムでは、講演とパネル・ディスカッションのあと、四つの分科会に分かれてさらに具体的な討論を行った。

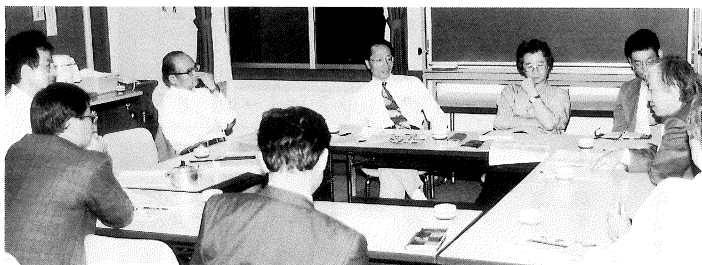
ここでは紙面の関係で分科会の報告を掲載し、報告にかえたい。なお詳細は、六月刊行

⑦

予定の記録書をご参照下さい。



現代の大学生は知ることの喜びを体験できていない。どうしたら学生が学問への興味を示し、それを醸成し持続的に発展させていくことができるのか——前列右より小林、後藤、潮木、岡（館長）、田丸、村上、深谷の各氏。後列右より松岡、八杉、徳重、石川の各氏



学生を巻き込んだ参加型の学習が動機づけを成功させる一つの方法ではないか——潮木（左から2人目）、後藤（左から3人目）の両氏を囲んで

## ●潮木氏を囲んで 学問にもエンターテインメントの 要素が必要

東京工業大学工学部助教 石川 謙

「最近の若者は『おしん』のように歯をくいしばって何事かをするのをダサイと思っている」。

潮木守一氏の講演は、現在の大学生の気分を分析するところから始まった。潮木氏によれば、多くの若者にとって価値判断のキーワードは「気分がよい」か「悪い」であり、学問や研究への動機づけを理論的な思考に立つて行なえるような状況にはない。では、どのようにして彼らに興味を持たせるか。その実例として名古屋大学大学院国際開発研究科の紹介ビデオを示された。

国際開発研究科には留学生と日本人学生がいる。日本人学生に対してはフィリピンなどで海外研修を行ない、現地の現実がどのようになっているのかを紙の上の知識としてではなく修得させるようになっている。研修には現地の学生

がボランティアとして参加していて、彼らとの会話を通しても日本人学生の視野が広がることであった。

また、留学生に対しては国内実地研修を通して日本のシステムを理解させている。これらの研修に当たっては学生に単に知識を与えるのではなく、学生がまず疑問を持つようにさせ、それに対して必要に応じた知識を提示するようにしているとのことであった。

この研修を例にして、潮木氏は一方通行の講義では学生の興味は引き出しにくく、学生を巻き込んだ参加型の学習が動機づけを成功させる一つの方法であることを指摘された。理科系の成功例として前世紀に「リービッヒの実験室」が非常に多くの業績を上げていた理由を紹介され、さらに初等教育の一部で行なわれている「仮説実験授業」にも触れられた。以上の例を踏まえて、潮木氏は静的な知識の伝授が中心であったこれまでの大学教育に対して、これからは、education + entertainment」という視点を持つ必要があることを提案された。

学問に entertainment の要素を入れるという潮木氏の提案の背景には、通常の講義で伝授されてきた静的な知識の多くは、現代の変化が激しい状況下では耐用年数が短く、単に知識を伝授するのではなく学生にとっての将来の糧とはならなくなってきたこと。それよりは、学生が知識を自ら獲得するための手法を身につけ

させることが教育のこれからの課題の一つであるという認識がある。「学問の動機づけ」の問題が決して学生の変質によってのみ発生したものでなく、学問・知識体系の変革の根本と結びついているものであることを認識させる講演と分科会での討論であった。

## ●後藤氏を囲んで 普遍的理念への関心が低い 現代の大学生

中央大学商学部教授 徳重昌志

後藤康夫氏は、パネル・ディスカッションのなかで、経済学の導入教育について次のように語った。

一九八〇年代に入って、日本経済は製造業の分野で欧米を凌駕するに至ったが、経済理論は、欧米から輸入される歴史観の欠如した数理経済学などにその中心があった。しかし、20世紀末の資本主義を眺めた場合、そこには産業革命以降の工業社会の終焉という事態が展望されるようになってきた。「資本主義はどこからきてどこにいくのか」という、歴史科学としての経済学の見直しが今ほど重要になってきている時期はない。

そのような視点から、現在、学問において大事なことは「事実の発見から学問に入る」姿勢を強調することであり、教員には、生活者としては学生と同じ立場にあるとの認識から学生と共同して研究し、学問する姿勢が求められている。そ

のことによって、学生を単なる学問の受け手から、主体的な担い手に変えることが可能になるのではないかと。

後藤氏を中心とする分科会では、工業社会の限界に直面しつつある現代文明のある種の閉塞状況を踏まえた多面的な議論が行なわれた。

そこで、共通に認識されていたことの一つは、学生が普遍的理念への関心を薄めているという事実であった。もちろん、学生が何かに関心を持ち、そのことにコミットしていききたいということがあるが、彼らにとっては等身大のテーマであるボランティアや宗教に関心を持ちやすいという傾向がある。

なぜこのような傾向が現在の学生に強く見られるのかということは、現代社会に、普遍的理念が重要な役割を果たすビッグ・イシューがなくなったことに関係があるかも知れないという指摘がなされていた。

しかし、核問題や民族問題や環境破壊など、ビッグ・イシューと考えられる問題は依然として存在しているという事実はある。

また、冷戦後の、東西対立の消滅の結果、兵器開発に関心が薄れ、物理学など理科離れを起こしているのではないかと、いう指摘があり、その意味でも、学問の方法論を見直す時期に来ているとの認識が示された。



●村上氏を囲んで  
興味ある分野を英語で学ぶ

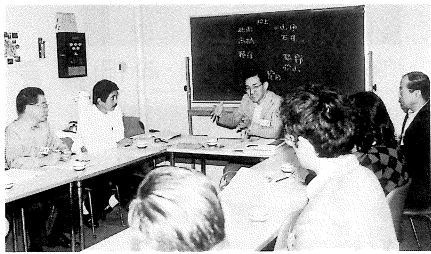
国際基督教大学準教授 松岡信之

村上健氏はご自身が所属される津田塾大学の英語教育の事例を中心として、学生に学問への動機づけをする上での視点をお話された。その要旨は以下のような内容である。

津田塾大学は創設当時から英語教育に力を入れ、英語教育を基盤としたリベラル・アーツ・カレッジという特色を打ち出してきた。そのため、その特徴を理解して入学してくる学生が多いように感じられる。したがって学問への動機づけには、まず、その大学がどのような教育をする大学であるのかを明確に提示することが大切なのではなからうか。

また、英語教育は英文科で扱うような「文化言語」としての英語と英米文学や英語学を専攻とはしない学生が身につけるべき「コミュニケーション言語」としての英語の教育とを区別して考える必要がある、このことは、学生の学習意欲の向上に大きく関連する。

また、英語教育を単に語学のトレーニングとして捉



英語に興味を持たせるためには——村上氏(正面)を囲んで

えるのではなく、社会の近代化と英語の関係など、テーマとして文化や歴史への関心を高めるような内容を盛り込む工夫が必要である。このことにより英語教育を教養教育として展開する途が開かれるのではなからうか。

村上氏を囲んでの分科会では、語学教育における具体的な動機づけの方策が主な話題となった。英語が嫌いな学生や英語が苦手な学生に対する具体的な方策として、映画などを利用して興味を持たせる方法や英語科の教員だけが英語教育をするのではなく、他の専門科目の教員が英語によって授業をすることにより、学生が興味ある分野を英語で学べるという利点が生まれることなどが話された。

また、英語に限らず高等学校までの教育と大学での教育との関連に留意することが大切であり、さらに入試の方法を検討することにより個々の大学の教育目標にあった学生を集めることが、学生の勉強意欲の向上に大きく関連することなどが話された。

●田丸氏を囲んで  
教科書持参の入試、入学後のカリキュラムを工夫する

東京都立大学理学部教授 八杉貞雄

田丸謙二氏は、山口東京理科大学の基礎工学部長として、この新しい学部を特色あるものとするために努力している体験から、理工系学部における動機づけに

ついて情熱的に語った。広い基礎学力を身につけた学生の育成を目指して、いくつかの斬新な方法を試行している。

例えば、入試では理科の科目については教科書持参ですべての問題を記述式にし、また物理離れという重要な問題を解消するために、物理学を選択しやすいうに工夫している。入学後のカリキュラムも特徴をもっていて、例えば社会からの需要に応じられるよう、コンピュータ教育や英語教育に力を注ぎ、また学科間の授業の相互乗り入れも行なっている。

これらのカリキュラムを効率的に運用するために教員は大きい努力を払い、詳細なシラバスを作成し、しかも学外の教員も含まれるシラバスの点検体制もできている。個性的な学生を育てるという大きな目標のためには、定食のようなメニューではなくアラカルト方式のメニューを用意する必要がある、というのが田丸氏の意見である。そのような背景に、例えば製鉄会社でもバイオの研究が必要であるといった社会的な要請があることも指摘された。

分科会ではこのような田丸氏のいわば実験的、先端的な動機づけのあり方をめぐって活発な意見が交わされた。

一方では、とくに大規模校の教員を中心に、偏差値で輪切りにされて入学してくる学生、忙しすぎる教員、教えるべきことのあまりの膨大さなど、学生に対する動機づけの困難を訴える教員もあり、

また一方では、それでもなお教員の熱意と創意工夫、ゼミの活用などによって4年間の在学年数を経た後には学生もまた変化すると主張する教員もあって、議論は白熱した。

また教員自身の資質を高めるにはどうすればよいか、教育と研究とアドミニストレーションをいかに調和させるか、自己点検評価はいかにあるべきかなど、必ずしも理工系だけに固有ではない問題についても議論された。

さらに、今回の懇談会の主要なテーマの一つである理科離れについては、大学以前の教育の問題と、大学入学以後の教育のありかたをめぐって多様な意見が提出された。

いずれも短い時間の議論で結論の得られる問題ではなかったが、この討論が参加した教員の問題意識を鮮明にし、それぞれの大学に戻ってから一層議論を深める契機となった。



入試で輪切りにされてくる学生の動機づけをどうするか——田丸氏(右より2人目)を囲んで

# 民主化の比較政治学

## ▼主題講演

早稲田大学政治経済学部教授 伊東孝之氏

## ▼ゲスト講演

民主化の可能性と限界―東南アジアの経験と理論的課題―

法政大学法学部教授 鈴木佑司氏

## ▼セクシオン演習

A アジア型民主化はあるのか―支配エリート、経済発展、グローバル化との関連で考える―

京都産業大学外国語学部教授 吉川洋子氏

B スペインにおける「政治的民主化」体制移行の諸特徴

中央大学法学部教授 若松 隆氏

C ラテンアメリカの民主化の試練―政治文化、経済転換、主体、国際環境

富山国際大学人文学部助教授 遅野井茂雄氏

D ロシアの民主化―それは必要なのか、また可能なのか―

亜細亜大学国際関係学部助教授 永綱憲悟氏

E 東中欧の民主化の構造―一九八九年革命と比較政治研究の新展開―

杏林大学社会科学部助教授 川原 彰氏

## 【運営委員】

早稲田大学政治経済学部教授 伊東孝之氏

【参加状況】 29名（16校）

慶応義塾（7）、早稲田（5）、東京・国

際基督教（各2）、東京工業・名古屋・明治・立教・日本・成蹊・津田塾・上智・千葉商科・東海・杏林・関西（各1）、その他（1）



近年、世界の多くの国々で政治の仕組みが大きく変わっている。冷戦時代には世界の国々はしばしば「自由圏」と「共産圏」に分けられた。「共産圏」諸国は一党独裁体制をとっていたが、いわゆる「自由圏」諸国も実は非民主的な体制をとる例が多かった。いずれにも属さない国々、つまり中立国、「第三世界」、非同盟諸国などもほとんど非民主的な体制をとっていた。

ところが、一九七〇年代の半ば頃から、まずギリシャ、スペイン、ポルトガルが民主化し、ついでブラジル、アルゼンチン、ペルー、チリなどのラテンアメリカ諸国が一斉に民主化した。さらにフィリピン、韓国、台湾などの東南・東アジア諸国が続いた。しかし、何といっても最大の出来事は旧ソ連東欧諸国の民主化だろう。最近では南アフリカのような人種主義国家の民主化も起きている。アメリカの政治学者ハンチントンは一連の政治変動を大きく民主化の「第三の

波」と呼んでいる。第一の波は十九世紀の初め、第二の波は第一次大戦後、今回は三回目というわけである。我々は冷戦の終了という大きな国際政治の転換に目を奪われて、各国の国内政治の転換を見落としてしまっている。後者は前者の副産物という面があるかもしれない。しかし、一連の民主化は国際的な変動に先だって起きており、それ自身の力学ももっていると考えるとよさそうである。

「第三の波」はなぜ起こってきたのか。地球上の遠く離れた地域に位置する三〇以上の国々が二〇年という人類史から見れば比較的短い期間に一斉に民主化したのはなぜだろうか。

これらの諸国は歴史も文化も社会構造も政治的伝統もまったく異にしている。にもかかわらず、いったん民主化の動きが起きると似たような経過をたどっている。どのような類似点、相違点があるのだろうか。民主化には一つの発展法則というものがあるのだろうか。

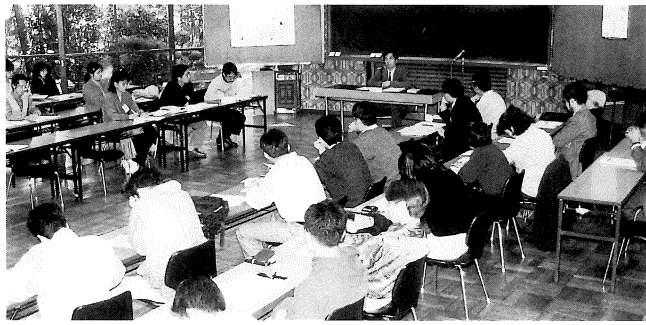
この問題は政治変動の予測性といういつそう興味深い問題と結びつく。旧ソ連東欧諸国の専門家は突然の政治変動に不意を打たれた。もし他の

地域における民主化の先例を研究していたならば今日の事態を予測できたのだろうか。民主化が予測できるならそれを外から促すことはできるのだろうか。民主化が予測できるならそれを外から促すことはできるだろうか。なお非民主的にとどまっている国が多いので、この問題は政策科学的な意味あいも帯びてくる。

すべての民主化が成功しているわけではない。ソ連から分離した中央アジア諸国は再び独裁への道を歩んでいるように



「第三の波」はなぜ起こってきたのか。民主化には一つの発展法則というものがあるのだろうか。民主化が予測できるならそれを外から促すことはできるのだろうか。民主化の最新の波は民主主義の先進国にとってどのような意味をもつだろうか―前列右より永綱、若松、鈴木、岡（館長）、伊東、川原、吉川、遅野井の各氏（ようこそ広場にて）



民主化の可能性と限界について講演する  
鈴木氏——講堂にて

見える。多くの新生民主主義国が激しい動揺を経験している。過去の波は大きな揺れ戻しを経験した。今回はどうだろうか。

最後に、民主化の最新の波は民主主義の先進国にとってどのような意味をもつだろうか。既成民主主義に新しい問題を投げかけていないだろうか。既成民主主義とはいつても日本はドイツやイタリアなどと同じくようやく第二次世界大戦後民主化したのであって、新旧の民主化の比較は双方にとって有益だろう。日本とイタリアで政治の仕組みが再び変わろうとしているのは「第三の波」と関係しているのだろうか。

今回のセミナーではこのように現に世界で起こりつつあり、私たちにも密接な関わりをもつ問題を取り上げ、討論することが目的である。

### 参加者の感想から

## ●「民主主義」は本当に普遍的な概念か

東京大学教養学部修士課程 坂梨 祥

このセミナーを通じて、普段あたかもある確固たる対象として存在しているかのように見受けられる「民主主義」または「民主化」というもののあやうさというものが、多かれ少

なれ感じとられるようになったと思います。

民主主義は普遍的な概念であるかのように語られますが、民主主義の「自由」は同時にたとえば貧富の格差などを生み出すという現実があります。たとえばラテンアメリカのように、国家の政策決定過程としての、そして一方では大衆を実質的にはいわば疎外した「民主主義」（手続き民主主義と呼ばれている）も存在します。このような「民主主義」とは、はたして時と場所を問うことのない普遍的な概念でありうるのでしょうか。

もちろん民主化の比較政治学というとき、

## ●デモクラシーとは、手続きだけの問題か

早稲田大学政治経済学部5年 川田宇一

アジア、スペイン、ラテンアメリカ、ロシア、東欧は、最近20年間に民主化の波に襲われた。日本のデモクラシーが50歳そこそこであることを考えれば、比較対象になる。しかし、それらの地域における民主化への関心、

デイレクマ・選択は、日本人のそれとは物理的・人間的にかけ離れているようである。いま、私たちの共感する能力が問われている。

デモクラシーといえは、下からの革命を礼讃するのが日本の特徴である。エリートの手段による民主化を非難するのである。少し考えれば、「世論」は魔物であることがわかるのに。問題の本質に、眼光を透徹したい。

政治が悪いと文句は言えど、投票するのはあほらしい。まして、デモクラシーについて語ることもない。政治改革がなされて、よ

## ●立体的に地域研究に取り組む

杏林大学社会科学部4年 町井 茂

今回のセミナーで重要だったことは、まずラテンアメリカに対する自分の知識というのがどの程度のものであるかということと同じセッションの大学院生や先生との討論の中で知ることができたということである。

今回のセミナーでは民主化の比較政治学という点で、ラテンアメリカ地域研究だけに留まっていた私にとっては少々厳しいものが

まずは手続きを重視し、ついで実質を見るところというアプローチを取らざるを得ないのであるというところは理解できます。しかし、何のための「民主化」であるのかと考えたときに、現在の状況を見るかぎりでは民主化とは「国際社会のルールを尊重するため」の一手段でしかないような印象も受けます。そして、民主化の背景にあるそもそも民主主義の基盤となるはずの人々の状況を見たときに、ルールの尊重としての民主化ばかりに注目することの有効性にも疑問を感じます。

ごびましたか？ ミヤンマーからの留学生は「軍が政治を動かすのは許せない」といった。確かに、日本の体制側のより巧妙な技術が、私たちが健全な無知に保っている側面はあろう。ただ、その状態に精神的恭順を示しているのは誰かしら。

私たちは何を「見る」べきか、何を「為す」べきか？ デモクラシーとは、手続きの問題だけではなかったはずである。ラッセルを真似ていえどもかく民主国家において、我々は、我々に相応しい政治を選ぶのである。

きな収穫であった。

私たちのラテンアメリカ・セッションの先生は遅野井茂雄先生であったが、これは私がこのセミナーに参加したいという気持ちの一番の要因になったことは、言うまでもない。ラテンアメリカを勉強の対象として本格的に意識し始めた大学二年生の頃から、資料を集めるたびに何度となく先生の名前につつかってきたからだ。今回は私の勉強不足で先生には迷惑をかけてしまったが、次回このような機会があったときには「少しは勉強したな」と思われるようになっていたいと思う。

# アジア・太平洋地域の行方

## —そのシナリオを考える—

### ▼全体講義

日本大学国際関係学部教授 宇佐美滋氏  
(運営委員)

### ▼セクシオン演習

A 冷戦後の日米中関係の行方

東洋学園大学人文学部助教授 朱 建榮氏

外務省北米局北米第一課課長補佐

関場誓子氏

B アジア・太平洋の政治と経済

創価大学経済学部教授 今川瑛一氏

八千代国際大学政治経済学部教授

笠井信幸氏

C アジア・太平洋地域の安全保障

青山学院大学国際政治経済学部教授

土山實男氏

防衛庁防衛研究所第一研究室長

小川伸一氏

D The Asia-Pacific Region and its Future

Scenarios

筑波大学社会学系教授 佐藤英夫氏  
(運営委員)

国学院大学法学部助教授 古城佳子氏  
(運営委員)

### 【運営委員】

中央大学法学部教授 滝田賢治氏

【参加状況】 89名(内女子30名)

①国籍別(内外国人35人)

日本(54)、中国(12)、韓国(6)、マレー



前列右より笠井、今川、岡(館長)、宇佐美、佐藤、古城、関場の各氏。後列右より朱、滝田、土山、小川の各氏——ようこそ広場にて

⑫

田塾・上智・聖心女子・東海・東京農業・駒沢・東洋英和女学院・専修・文教(各1)、その他(2)



古い冷戦の枠組みが崩れたのに、新しい枠組みはできず、政治も経済も軍事も社会も羅針盤のない船のように漂流している。世界の中でもアジア・太平洋地域はこれまで大いなる成長の地域として牽引車の役割を演じてきた。しかしここでも問題は多く、油断はできない。大きな曲がり角にさしかかっているといっても過言ではない。

いまこの地域の中心的な日米中三大国の間では、深刻な対立が生じ、とげとげしい言葉が飛び交っている。まるで三つ巴の争いのようなのだ。この三国が対立している限り、この地域に平和と安定はありえない。

急速な発展に伴う、政治・経済の諸問題も多い。人口の膨張、エネルギー需要の増大、環境汚染、食糧需要に対する供給不足など。成長に熱中しているときに、抑制をいうのは辛いことだが、これらはすぐ明日に迫った現実であることを忘れてはなるまい。

脱冷戦期になって米ソ両超大国間の核の睨み合いは終わり、核軍備の縮小が行なわれて、核拡散防止条約が無期限延長された。しかし、核保有国の中にはまだ核兵器を充実しようと、実験を強行するものがある。

また廃棄後の核兵器のさまざまな管理からくる核兵器・物質・運搬手段の拡散やテロの危険も新たな問題となりつつある。サリンや生物兵器などは新興宗教組織が乱用したために、われわれもその危険性を身近に感じることとなった。

こうした新たな状況の下では新たな安全保障体制をどう組織したらよいのだろうか。日米安保についても米国から継続案や廃止案など、さまざまなボールが投げかけられていることにも注目したい。

以上がセミナーのテーマであったが、プログラムではこのアジア・太平洋地域における対立を解きほぐし、和解と協調に持ってゆくためのシナリオをめぐって活発な討論が交わされた。

今回は、日本語ができない留学生のために、特別に英語で討論するセクシオンを設けた結果、13カ国35名の留学生の参加が得られた。この国際プログラムの趣旨に相応しい「学問を通しての国際交流の場」となったが、このように多くの留学生の参加が得られたもう一つの背景には、このセミナーの参加者でつくっている「国際学生セミナー同窓会」から参加経費の補助があったと思われる。留学生からも感謝の手紙をもらっていることを報告するとともに、紙面を借りて同会に感謝の意を表したい。

なお、このセミナーの詳細は参加学生を中心に編集作業が進んでいる報告書をご覧ください。

交流の必要性を改めて認識——中国と台湾の学生が率直に意見交換して

筑波大学大学院国際政治経済学研究所博士課程  
潘亮

日本に来て既に一年半経ったが、このよう  
な国際交流活動に参加するのは初めてであり、  
最初はどうなるのだろうかとかかなり緊張して  
いた。しかし、二泊三日の日程が終わった時、  
多少疲れを覚えているながらも参加してよかつ  
たと大変満足していた。

まず、セクション演習における突っ込んだ  
議論によって国籍やアイデンティティなどの  
障害が一掃され、学生同士の相互理解が深  
まったことが非常に印象的である。特に、私  
の所属したAセクションでは「冷戦後の米日

中三国関係」をテーマに議論を行なったが、  
この三国関係を分析するには台湾問題を避け  
て通ることができない。

中国大陸と台湾出身の学生を中心にこの問  
題をめぐって率直に意見を交わした。その際、  
台湾の学生達は自分の悩みや大陸に対する複  
雑な感情を話してくれた一方、大陸の学生も  
台湾問題に関する個人的考え方やその平和的  
解決への期待を表明したのである。さらに、  
平行線のままで何の成果も収められない政府  
間交渉とは違って、学生同士の腹藏のない対  
話を通じて一致した見解も数多く見出された。  
これは台湾の学生といくら議論しても結局水  
掛け論にすぎないと思っていた私にとって、  
大きな収穫であると同時に、交流の必要性を  
改めて認識させるといふ意味で非常に良い教  
訓になった。

また、各セクションにおいて議論しきれな  
い問題を他のセクションのメンバーとも真剣

に議論した。意見の食い違いによって、時々  
「口論」する場面さえ見られたが、説得力のあ  
る根拠に基づいて自分の主張を堅持すること  
の重要性を思い知る最高の訓練になった。(中  
国)

アジア型の対話協調型外交で、  
自発的に自由化を目指すべきだ

創価大学経済学部三年 鐘維平

Bセクションに参加した感想を述べてみた  
い。APECは、さまざまな多様性を持つ構  
成員から成り立っているわけで、欧米型の  
リーダー・シップ論はかえって分裂をまねき  
やすい。そこで、アジア型の対話協調型外交  
がとられることが望ましいのではないでしょ  
うか。

これは、互いに合意ができれば、牛歩  
してしまふのではという懸念がしばしば論じ  
られます。互いの合意のもとで、自発的に行  
なわれれば、その責任を他国に転嫁したりす  
ることなく、自らの責任のもとで自由化を目  
指すことができます。

その例の一つに、一九二九年に起こった金  
融恐慌があげられます。このときも、各国が

保護貿易政策をとったことで、経済的に弱小  
であった日本あるいはドイツを領土拡張政策  
へと向かわせたことは否めません。

こうした歴史的事実の上からも、国あるい  
は地域を孤立化させることは極めて危険です。  
現実的に考えるならば、ASEANはEUと  
地域双方の相互間交渉をすで行なっていま  
す。

これは、ASEANにとってEUが、日本  
や米国同様に巨大な市場であり、自らの成長  
の糧たる技術供給者の一つであることから、  
さらには、旧宗主国という歴史上の事実から  
も伺い知ることができます。

APECは、開かれた地域主義をかけた、  
多種多様な民族・国家を考慮に入れつつ、互  
いの合意のもとに自由化を推し進めていく自  
発的な話し合いの場であればなりません。

このセミナーの参加により、もっともっと  
勉強しなければならぬという「反省」もあり  
ましたが、自分の視野、考え方がより一  
層広くなったと実感しました。(マレーシア)

紛争防止のためには、信頼醸成の  
予防外交を

横浜国立大学大学院修士課程 木全洋一郎

私が参加したDセクションは、過去21回の  
セミナー史上初の英語で討論する分科会とし  
た。18人中15人が英語を母国語としないにも  
かかわらず、ほとんどみんな聴取することなく  
自分の考えを積極的にぶつけることができた  
のではないかと思います。

「アジア・太平洋地域をどう見るか」とい  
うこと一つとっても、イギリスの学生は「世界  
は小さくなっているが、アジアは大きくなっ  
ている」と言えば、すかさずフィリピンの中  
生が「それは欧米的な見方である」と切り返  
してみたり、また一方で「アジア・太平洋地域  
はまだ地域として一体化していない」という

Seeking to contribute to global security more in the future, Japan will not discard some of its traditions of thinking about security policy

東京大学大学院法学政治学研究所 Christopher W. Hughes

C Section held three 2 hours seminars and the aim of each was to promote discussion among the students and teachers about contemporary security problems in the Asia-Pacific region. This format worked particularly well and it was a valuable opportunity for me to exchange opinions with Japanese students and academics about attitudes towards security policy, and, in particular, the problems of the US-Japan alliance and the future of multilateralism in the region. All the students were forthcoming with their views and I was impressed with the great depth of knowledge about security problems and nuclear strategy that many of the students had.

My overall impression of the seminars was that I would like to see Japanese students question more strongly the thinking of the US in regard to security policy and to develop stronger conceptions of security policy which are not wholly reliant on the US. Undoubtedly the US alliance and examples of security institutions from other parts of the world are essential to Japanese security and will continue to be, but I would hope that whilst seeking to contribute to global security more in the future, Japan will not discard some of its traditions of thinking about security policy that may also be valid in the post-Cold War era.

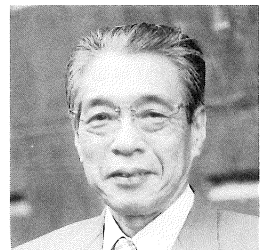
I found the seminar a useful experience and was stimulated by many of the discussions. In addition, I met some very interesting students and it was an excellent chance for interaction and the exchange of opinions with students from many countries. I would, therefore, like to thank the organizers for their finical support in the shape of the scholarship, and the teachers for devoting their time to the seminars. (イギリス)



活発な議論が展開された英語セクション  
——セミナー室にて

# 新理事長に、佐野博敏東京都立 大学前総長が就任

三〇周年記念の集まりを終えた八月一日、すでにご報告の通り長年にわたり当ハウスの発展に尽くされた中川秀恭理事長がご退任、佐野博敏氏が新理事長に就任された。



佐野博敏氏略歴 昭和3年生まれ。昭和28年東京大学理学部化学科卒業、31年東京大学助手、34年理学博士（東京大学）、38年お茶の水女子大学助教授、47年東京都立大学教授、59年東京都立大学評議員、60年東京都立大学教養部長、62年度日本化学会賞受賞、平成元年東京都立大学総長、5年東京都立大学名誉教授、7年大妻女子大学教授、現在に至る。

## 理事長に就任して

大学セミナー・ハウス理事長  
佐野博敏

この度どういう運命のいたずらか中川秀恭先生のあとを受けて、大学セミナー・ハウス理事長に就任することになりました。現今の教育環境の諸問題とそれに対するセミナー・ハウスの役割を考えれば、今まで利用者としてお世話になるばかりであった凡愚の私には、その責務の重さは過大と思われまます。それを敢えてお引き受けしたのは、いろいろな方々のご説得のもし難かつたことととも、今の教育環境の急変のもたらす歪みの大きさに心が傷んでいたからかと思えます。

ここ数十年の間だけでも私たちの社会のエネルギー消費量は指数関数的に急増しました。このエネルギー消費は好悪を超えてすべての活動を何らかの形で加速してしまいますが、速度は時間に反比例するのですから私たちの時間の著しい喪失を

招いているとも言えます。教育環境の変化もこの流れの中で例外たり得ません。教育を使命とする者が自らの体験をそのまま（あるいは多少の手直しで）若者に伝授して務めを果たせた時代ではなくなつてしまいました。自信を失つた親が教育から躰けまでを学校などに求めるのもその象徴的症例と見受けられます。そして任された教師も教育にかけける時間を失つて手が尽くせないのが現実です。

多臓器不全の一手手前ともいふべき今日の教育環境問題に際して、多くの教育論が聞かれますが、教育の理念や総論はすでに古くは中国の古典から近くはルソーなどの教育論等々においてほとんどが実は言い尽されています。患者を前にしては、画餅の総論よりもいかなる処置を実行実践するかが求められている筈です。しかもいくつもの臓器に問題がある場合には、その治療には全体の健康状態を見きわめる高い視点からの広い視野が大切です。たとえば大学の教育の検討には、高校、中学、小学校、さらには家庭や社会と教育の関わり方、そこで生じている様々な歪みの実状、症状を知る必要

があります。それらへの配慮なしに対策を立てても、それは単なる対症療法にか過ぎず、根本的な回復をもたらす期待をし難いと思われまます。

幸い、セミナー・ハウスには分野を超えて教育に関心の深い多くの諸先生が参画されています。また、セミナー・ハウスのすぐれた企画と活動は、人間の個々の心の成長に造詣の深い岡宏子館長を中心として熱心な職員や関係者の皆さんによつて支えられています。さらに創立三十年の歴史には多くの先達の築かれた貴重な御努力の積み重ねがあり、その使命に賛同し支援して下さる方々も大勢いらっしゃいます。これらは大変心強いことです。三十年の風雨に曝されて改善や改修すべき問題点も少なくはありませんが、有難いことに清新の気も漲っています。これら熱意の溢れる諸先達、諸先生や職員ならびに関係者各位に励まされ、及ばずながら私もセミナー・ハウスの掲げる高い理想の実現に近づくべく共に力を尽くしたい所存です。

この機会に宜しく御協力のほどをお願い致します。

13頁よりつづく  
日本人学生や外からEUやNAFTAと対比させて見るフランスの学生もいる……。といった具合に本当に様々な意見が出されてなかなかまとまりのある議論という訳にはいきませんでした。しかし、そうした多様な意見こそがそれぞれがもつ「国境」を表すものであつて、互いにそれをぶつけ合い、分かち合えた点において、我々が真に心の「国境」を越えることができたということの意味するのだと思つていきます。

今回のセミナーに参加して感じたことは、月並みですが、「私たちは必ず分かち合える」ということです。冷戦が終結して5年余りが過ぎた現在、なお多くの地域で紛争が起り、アジアでは冷戦期以上の軍備拡張による緊張状態が続いています。一九九五年十二月に発表された世界の終末時計では、九一年の破滅の17分前から14分前と再び3分進みむ結果となつていきます。

こうした状況の多くは、民族や宗教といった心の「国境」を隔てた戦いであると言えます。「戦争は人の心の中で起るものだから、人の心に平和の砦を築かねばならない」というユネスコ憲章の前文にある通り、紛争の防止のためには、互いの心に信頼を醸成すべく予防外交を展開することが必要なのを未然に除去していくことが必要になってくるでしょう。安全保障を考える上で、貧困、環境破壊といった新たな地球規模の課題が深刻化していることを見過して、軍備を増強し、心の「国境」を核の傘で覆いかぶせることに満足することの有効性がどこまであるのでしょうか。

今回のセミナーのように互いが心の「国境」を越えて分かち合うことこそが、多様であると言われる「アジア・太平洋地域」のシナリオを作る鍵になるでしょう。この戦後50年をもって、二度と「アジア・太平洋地域」が核の被害地にならないことを祈つて……。

# 千人会

1995年9月11日

## ◆ご入会ありがとうございました

- ◇八杉貞雄殿：東京都立大学教授／B
  - ◇山住正己：東京都立大学学長／A
  - ◇徳重昌志：中央大学教授／C
  - ◇土井二郎：築地書館(株)取締役代表／C
  - ◇北原和夫：東京工業大学教授／A
  - ◇中山勝博：早稲田大学国際交流センター職員／C
  - ◇立岡浩：東京大学国際保健計画学教室大  
学講師兼大学院生／C
  - ◇斉藤大也殿：NHK著作権契約部／C
- ◆会員数Ⅱ一、四四二名

- 村田光二、佐藤東洋士、千羽喜代子、原島幸太郎、井上孝、色川大吉、梅沢豊、小沢重男、市川博、岡村浩、村山松雄、新井勝敏、伊藤一郎、荻原洋太郎、國岡昭夫、渡辺昭夫、大福族生、有末賢、松瀬貞規、山本武彦、石黒哲郎、鈴木一、下田弘、大村晴雄、岡村文子、増田茂樹、田中弥寿雄、八幡義博、宮野三郎、伊藤清子、船山信子、大口勇次郎、十代田知三、小林祐子、長内了、鶴野省三、林勲、並河一道、合田周平、藤田淑子、島岡丘、朽津耕三、岩崎征人、寺川國秀、尾崎享子、沖塩莊一郎、内田祥哉、松田武彦、岡沢憲美、榎林博太郎、釜瀧善一、岩崎不二子、石村善助、井手久登、武澤信一、田端光美、小堀桂一郎、出居茂、古屋野正伍、谷俊治、岡野澄、大澤綱一郎、山住正

己、永井克孝、田中栄、塩見利夫、末松安晴、加藤一郎、奥田眞丈、酢屋善元、石橋秀雄、田中昭二、青柳清孝、尾形憲、吉原健吾、高村多賀子、朝倉孝吉、関本昌秀、鞍馬菊枝、池上秋彦、安嶋彌、大東百合子、井門富二夫、本間正人、関口利男、山田耕司、神田信夫、平野健一郎、鈴木俊和、斎藤信房、今井淳、稲垣寛、前川真理、新田悟、土井二郎、松岡八郎、藤永保、田村献、石井竹松、石堂常世、川原栄峰、三輪公忠、東壽太郎、山岸健、松田千鶴子、須田精二郎、平野敬一、板垣與一、矢吹晋、天利長三、堀光男、大谷登士雄、松田徳一郎、大竹誠、保坂純子、江尻美穂子、宮田登、長松昭男、森玲子、荒川幾男、貝塚爽平、井関利明、安達義明、篠崎啓助、岩下秀男、小幡史朗、高橋三郎、戸田盛和、大貫一、佐藤公子、久武雅夫、助盛晴、秋田成就、江藤一洋、木畑洋一、平澤茂一、鶴岡義一、八木江里、宇野重昭、牧内操、森田信義、森岡清美、宮野彬、田島澄江、小田滋、米満澄、福田隆義、吉武泰水、清水護、伊藤玄三、久留都茂子、熊川忠、吉本昌司、大島英樹、田村皖司、藤林宏一、太田時男、齊藤孝、祖父江孝男、角尾稔、笠井伍朗、齊藤大也、戸張よし子、笹島恒輔、納富照枝、青木生子、若林俊輔、大島葉子(敬称略)

## おたより

- 今春、電気通信大学を退職し、引き続き愛知学院大学で教育研究を行なっております。(愛知学院大学教授・荻原洋太郎)
- 歴博では、今年3月、私が担当した一九三〇年代までの近代史の展示が開室しました。機会がありましたら、ぜひご覧下さい。(国立歴史民族博物館助教 新井勝敏)

## 平成7年度 大学教員研修プログラム委員会

- ▼第3回 '95年9月18日/アイビー・ホール  
【出席者】絹川正吉、中田良平、山内正平、井下理、佐々木一也、建部正義、福田一郎  
【ハウス側】岡宏子館長ほか企画室スタッフ3名  
●主な議事  
『FDハンドブック第3版』の編集、大学改革推進等経費の支出予定、第10回大学教員研修プログラムの募集結果、第10回大学教員研修プログラムの運営と準備、他。

- ▼第4回 '95年9月24日/大学セミナー・ハウス交友館  
【出席者】絹川正吉、中田良平、山内正平、井下理、亀山純生、佐々木一也、建部正義、原一雄、福田一郎、宮腰賢、蛭山道雄、小林志郎  
【ハウス側】岡宏子館長ほか企画室スタッフ3名  
●主な議事  
第11回大学教員研修プログラムのテーマと構成、他。

- ▼第5回 '95年10月19日/アイビー・ホール  
【出席者】絹川正吉、中田良平、山内正平、

- 先日の三〇周年記念シンポジウム、大変な御努力を感じ、深く感服いたしました。この刺激は老生にとって近年にない活力となりました。(順天堂大学名誉教授・山本武彦)
- 開館三〇周年を記念に心ばかりの支援を送りたいと思われました。(東京学芸大学教授・並河一道)

- 私の場合は夫宏が東大理で千人会初代会長の山内恭彦先生の弟子でした御縁で(私共の仲人もしていただきました)私が入らせていただいた次第です。(藤田淑子)
- 岡先生のご丁寧な誕生日のお祝い状有り難

佐々木一也、原一雄、福田一郎、宮腰賢、蛭山道雄、小林志郎  
【ハウス側】岡宏子館長ほか企画室スタッフ3名  
●主な議事  
第10回大学教員研修プログラムの実施報告、次年度大学改革推進等経費の担当校、第11回大学教員研修プログラムの企画について、『FDハンドブック第3版』の編集について、他。

## 第2回共同セミナー委員会

'95年11月6日/アイビー・ホール

- 【出席者】野崎昭弘、桜井哲夫、宇波彰、柴坂寿子、佐伯胖、松井孝典、長谷川真理子  
【ハウス側】岡宏子館長ほか企画室スタッフ3名  
●主な議事  
第167回大学共同セミナー「民主化の比較政治学」の実施報告、第168回大学共同セミナー「電子メディアと21世紀のライフスタイル」の準備状況、第169回大学共同セミナー「文学の方法としての『漱石』(仮題)」の準備状況、第170回大学共同セミナーの企画、第171回大学共同セミナー「企業社会とジェンダー(仮題)」の企画、第172回大学共同セミナー「環境と文明(仮題)」の企画、第173回大学共同セミナー「映画の100年(仮題)」の企画、他

う存じます。お蔭様でどうか元気いたしました。居りますので御放念下さいませ。先生も大事に。  
●9月早々からイギリスでの調査にあわただしく出かけてしまいい遅くなりました。  
(日本女子大学教授・田端光美)

- 当年七九歳となり、また頼まれるままに在職しています。(常磐大学教授・古屋野正伍)
- 東京医科歯科大学にはじまり、東京学芸大学を定年で退職、現在は三つ目の仕事です。医療・教育・福祉と三つの経験になります。(コロンビー嵐山郷・谷俊治)

●今春から三菱化学生命科学研究所の所長をつとめております。八度目の転身でございます。海外に居てご連絡がおくれました。セミナー・ハウスの一層の発展をお祈りします。(憲法みどり農の連帯共同代表・尾形憲)

●会費おそくなり申訳ありません。昨年度来、それまでの倍くらい忙しくなつて、なかなか郵便局にも行かれない有様です。(明海大学学長・大東百合子)

●昨年秋九死一生の病気体験をしましたが、4月より無事社会復帰できました。今までは違った眼で自然を観ることができるようになりました。(武蔵大学教授・今井淳)

●この3月末にて定年退職しました。これからも健康に留意して励んでいきたいと思っております。(東洋大学名誉教授・松岡八郎)

●去年は失念し大変失礼しました。皆様のご努力にいつも感謝しております。この度NEDO提案公募最先端型研究が決定し、多額の研究費が戴けることになりました。(工学院大学教授・須田精二郎)

●北京で十日間、過ごしました。中国人民大学の招きによるものでしたが、北京の秋を楽しむことができました。(慶応義塾大学教授・山岸健)

●誕生日のお祝いメッセージ、有難く拝受。誕生日に間に合わせるためにも、自筆の添え書きは一行のみとすること。一年中年賀状を書いているような重労働から解放されないと、からだがもちません。(一橋大学名誉教授・板垣興一)

●八〇歳になりました。毎年学生と春のオリエンテーションにお世話になつたことを懐しく思い出しております。(東京都立立川短期大学名誉教授・大竹誠)

じめとして、みなさま、多摩のきびしい寒さにもお元気で活躍下さい。また、新年早々に、お邪魔いたします。食堂のごはんが楽しみです。(東京都立立川高等保育学院講師・森玲子)

●岡先生の美しいお手にて喜寿のお祝の言葉をお書きそえたいただきまして、まことにありがたうございました。やっとう〇歳の平均余命をこえたところです。一病息災で暮らしています。御無沙汰しておりますがセミナー・ハウスの御発展を祈ります。(早稲田大学名誉教授・鶴岡義一)

●日本をはなれて二〇年、すっかり日本が遠くなりました。(国際司法裁判所裁判官・小田滋)

●私も本年3月末で中央大学が定年退職となりました。また伺わせていただきます。(山下幸夫)

●9月中旬に三年越しで準備してきたThe Second International Conference on Research and Communication in Physicsという日本では初めての国際会議を国連大学で開きました。世界44ヶ国の物理学学会会長乃至役員60余人を招き、日本側50人で21世紀を目前に変動激しい世界にあつて物理学者、物理学会に社会から何を求められており、また何をなすべきかにつき5日間密度の高い議論をいたしました。冷戦終結が米国や欧州の物理学者たちにどんなに大きなインパクトだったかを改めて感じました。国際協力、地域的国際協力、教育問題、基礎科学と産業の関係、開発途上国や旧ソ連・東欧諸国の物理コミュニティへの援助等々実りの多い議論ができたことを喜んでおります。(福井工業大学教授・小林淑郎)

●二歳の折に書いた初めての論文『プロタゴラス篇』における徳についてを三九年年間大学教師を勤めあげた目から読み返しています。これをきっかけとして『プロタゴラス』そ

のものを改めて読み進めてみますと新しい発見があり、知的好奇心を触発されています。(田村皖司)

●横浜国立大学長退官後は海外の大学で講義を行なっています。今年はサンパウロ大学、イスタンブール工科大学、中南国立大学などで大学院の講義(2単位)を済ませました。(太田時男)

●大学から解放されて2年余、期待した自由人になることのむずかしさを痛感しています。セミナー・ハウスのさらなる進展に日夜専念されていらつしやる岡先生を、ひそかに応援しております。(日本女子大学名誉教授・青木生子)

### 寄贈図書

95年6月〜11月

- 『早稲田の四季』 染谷恭次郎殿
- 『人間らしく生きるために―新しき村について』 新しき村殿
- 『PHILOSOPHIE IN JAPAN』古英語文法研究』、『会計制度史比較研究』学習院大学殿
- 『思い出の人―茅誠司』 茅先生遺稿・追悼文集刊行会殿
- 『フィリピンの権威主義体制と民主化』 国際書院殿
- 『民主化の比較政治学―権威主義支配以後の政治世界』 未来社殿
- 『亜細亜大学：国際関係紀要第4巻第1号』 亜細亜大学国際関係学会殿
- 『東京大学社会科学研究所紀要―社会科学研究第40巻第1号』 東京大学社会科学研究所殿
- 『民主主義の天使―ポーランド・自由の苦き味』 同文館殿

### 寄付

95年9月〜11月

- 『日本の芸術論 内なる鑑賞者の視座』 荒川有史殿
- 『ブータンに図書館をつくる』 石田孝夫殿
- 『勃興する地域東南アジア経済Q&A100』 亜紀書房殿
- 『東中欧の民主化の構造―一九八九年革命と比較政治研究の新展開』 有信堂殿
- 『原典中国現代史』 岩波書店殿
- 『現代ペルーとフジモリ政権』 岩波書店殿
- 『冷戦後ラテンアメリカの再編成』 岩波書店殿
- 『開発と政治―ASEAN諸国の開発体制』 アジア経済研究所殿
- 『ラテンアメリカ政治と社会』 新評論殿
- 『ポリアーキー』 三一書房殿
- 『ニューイングランド社会経済史研究』 明治大学社会科学研究所殿
- 『一橋大学百二十年史』 一橋大学殿
- 『内外学生センター50年史』 内外学生センター殿
- 『第三の波―二十世紀後半の民主化』 三嶺書房殿
- 『ポスト共産主義の政治学』 三嶺書房殿
- 〈一般寄付金〉
- 三〇,〇〇〇円 東京都立大学小沢有作ゼミナール殿
- 一〇,〇〇〇円 明治大学教授長谷川昭彦殿〈現物〉
- ビデオカメラ一式 順天堂大学医学部附属順天堂医院第30回病院業務改善セミナー殿



# 業／務／通／信

## ●開館30周年記念特集

### 「私と大学セミナー・ハウス」

(そのⅡ)

前号に続いて「業務通信」を開館30周年記念特集とし、「私と大学セミナー・ハウス」三編をお届けする。ハウスの年輪「30」を刻んでこられたおおいの方々の中から、前号では、たまたま記念の年に「最終合宿」を迎えられたお二人と「第二世代教師」のお一人にそれぞれのメッセージをお願いしたが、本号では同じ年に「20回目の合宿」を数えられたお二人と「第二世代教師」もうお一人に、ハウスとの関わり、そしてこの節目に想うところをお寄せいただいた。

## ●「20回目の合宿」に想う

〈その1〉 芝浦工業大学建築学科「八王子建築ゼミ」。初回は76年の夏だった。その一年前、75年9月、ハウス主催の大学共同セミナー「生活と環境——日常生活の科学——」に三井所清典先生が、建築学の師・内田祥哉先生（東大）と共に、運営委員として参加されたことが、今に続く「八王子建築ゼミ」発足への機縁となったのである。

「寝食を共にしながら他人の話に耳を傾け、考え、自分の考えを発表する体験は人の心をひらかせるものであることを知りました。」スケジュールの進行とともに学生同士や講師たちとの付き合いが目に見えて深化し、初めて出会った学生や講師の間に大きな絆が出来上がったよう

## 「20回目の合宿」を迎え

### 共同セミナーがモデルだった「八王子建築ゼミ」

芝浦工業大学建築学科教授

三井所清典

毎年2年生の夏休み中に開催する私たちの「八王子建築ゼミ」も、いつの間にか20回を数えるにいたった。よく続いたものだと思う。ゼミの最後に行なう発表会と、参加者全員の合宿に参加しての感想を聞く毎に、学生たちの胸襟を開いた素直な言葉に教師バカ丸出しで感激し、「ヨシ、来年もまたやろう!」と決意を固めて続けてきた。

大学に入った学生たちが専門科目に触れることなく一年を過ごし、二年前期で初めて建築学の基礎を学ぶことになるが、八王子建築



20年後の「八王子建築ゼミ」を終えて——今年も夏休み終盤に2泊した。前列左から3人目が三井所先生  
(’95.9.13/ようこそ広場)

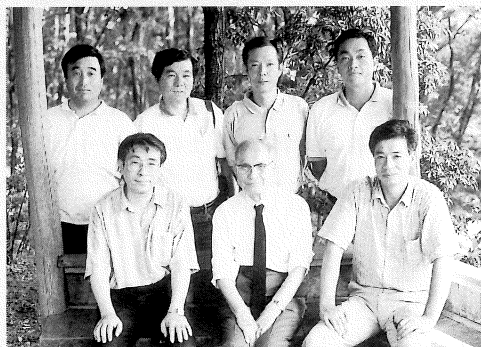
ゼミではこの大切な時に、建築を学ぶ楽しみを教師たちと共に体験することを目的に二泊三日を過ごすことにしている。

初めの頃は建築学科教室の教師は全員参加、学生は自由参加で約半数の五、六十人が参加した。最近ではグループの生活単位を参加学生十五人に対し教師二人の組合せを目的としており、教師はほぼ一年交代で当番が回ってくる。建築や都市に関するテーマを定め、密度の濃い交流を行なう。夏休み明けの後期の授業では毎年教室の雰囲気がいよいよ和らぎを感じるのも楽しみの一つである。

そもその始まりは、大学セミナー・ハウス主催の大学共同セミナーに私が講師として参加し、いろいろの大学から来た学生たちが、見る見るうちに親しみを深めていく様子に感動し、芝浦工大建築学科二年にそのゼミ方法を導入したことになる。

毎年ゼミのはじめにお願いするハウス職員の独得の口調で語られる「セミナー・ハウスでの生活」は妙に学生たちの心の扉を開くみたいで、生活リーダーのもと、学生たちはいきいきとしたグループ生活を楽しむ。これも長続きの要因である。

20年間延べ約千人の学生たちが八王子の丘で代えがたい青春の三日間を過ごさせてもらったことに、建築学科教室一同深く感謝している。この八王子ゼミはこれからも継続する予定であり、大学セミナー・ハウスの四十年も共々に祝わせてもらおうことを心より願うものである。



卒業後の再会「20回」を喜び合う——大澤先生（前列中央）とゼミOB諸氏  
(’95.8.20/一福亭)

その後、9人の学生が卒業して社会人となった一九七六年八月の合宿を第一回とし、以後毎夏八月の第一週末に一泊二日のゼミを定期的に行ない、往時の感激を新たにする機会としてきたが、これも今年の八月で第20回目に及んでいる。

この会合では、主として、過去1年間における職場および家庭における生活の反省が、各自、持ち時間30分間で語られ、お互いに大いに啓発し合っている。このように合計30回もこの丘を訪れた理由は何かと問われれば、この丘は特別に魅力に富んでいて合宿に最適であり、どの再会合宿も大きい成果を与えてくれたからである。

最後に、このような学びの丘を創設して下さり、その後30年の長い期間にわたってこの丘を支え育てて下さった多くの方々のご努力に対し、深い敬意と感謝を捧げ、ハウスの今後ますますのご発展をお祈りする次第である。

## 卒後も20年、定例の「再会合宿」

東京理科大学元教授

大澤 綱一郎

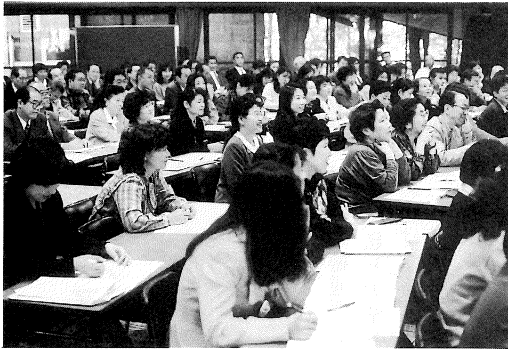
ゼミの学生9名と初めて大学セミナー・ハウスを訪ねたのは、一九七三年八月で、当時学生は理工学部物理学科の2年生であった。物理学を学ぶ基礎となる数学書(H.K. Davis著『Advanced Engineering Mathematics』八五〇頁)を選び、こゝでその輪読を始めた。

一九七六年三月の卒業までに計10回の合宿を行ない、大いに輪読の成果がありがた、分厚い数学の英文原書を読了した。これは私にとっても学生にとっても大きい感激であった。

な思いでした。

当時の記録に、「合宿セミナー」の意義についての三井所先生の右のような感想が残されている。幸い同じ学科の同僚に共同セミナーの講師の体験者がいて、早速翌年、建築学科2学年にこのセミナーの手法が導入されることになったという。以来、20年間、毎年夏休みに継続されてきた二泊三日の合宿。そこで延べ約千人の建築を志す学生たちが、かつて三井所先生が共有したいと願った「共同セミナー体験」を持ったことになる。

（その2）東京理科大学大澤ゼミの「再会合宿」。毎年8月の第一週末。夕食時に本館4階の食堂に上がって行けば、そこには、決まってあのピアノに近いコーナーの、これも毎年ほとんど同じテーブルを囲んで歓談する10人ほどの姿を見ることが出来る。大澤綱一郎先生と同ゼミのOB9名が、卒業後もこれまで20年間続けてきた、年に一度の「再会合宿」である。同じメンバーが在学中に原書輪読で三年間に行なった10回の合宿



ハウスと共に「30周年」を祝った順天堂大学病院業務改善セミナーの研修風景  
( '95.10.21 / 講堂 )

## 私とセミナー・ハウスとの出会い

津田塾大学助教授 村上 健

一九七二（昭和四十七）年九月十六日——下宿に近い井の頭線東松原駅から京王線を乗り継いで降り立った北野駅は、周囲にあまもり建物もない小さな木造の田舎駅だった。その気になれば意外に簡単に都会から自然のなかに飛び込めることに軽い驚きを感じながら、駅前からさらにバスに乗り、野猿峠で下車。

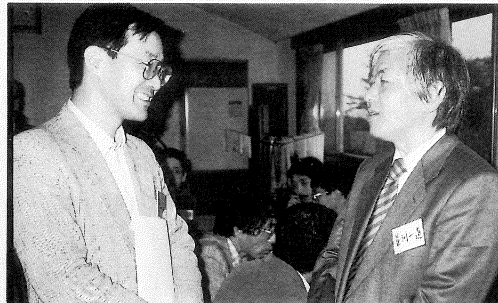
文字どおり「野猿」に出会ったとしても何の不思議もないほどの山のなかに、《大学セミナー・ハウス》はあった。当時、東大教養学部の学生だった私は、松尾教授（法学）主催の「生命の尊重と法律」という自主セミナーに参加していたが、その学期末の合宿が此処で行なわれたのである。

文系・理系を問わず集まった学生たちは、と合わせると30回を数える。かつて大澤先生がお便りの中で次の一文を寄せられ、だから毎年この丘で合宿を続けるのです、と言われたことを、そしてその指摘に値するハウスを目指さなければならぬ、との思いを深くしたことを思い出す。

「やはり大学セミナー・ハウスは、ここにあるホテルやハウスとは大いにちがうことが思い出されます。ここには温かい心がみなぎっており、ここにくる者だれも、心が楽しくなるのです。楽しいすなおな心がゼミをやるための大切な要素の一つです。」

18

「心臓移植・安楽死・堕胎・死刑」といったテーマをめぐる、深夜まで議論を続けた。さまざまな学説を紹介しながら、「生命と死」を法で律するうえでの問題点を手際よく整理していたI君。医学的視点から問題提起しつつ、巧みに皆を挑発していたN氏。もう一人のN君は試験官の培養対象としての生命を語り、さらに文学的・哲学的議論が幾重にも絡



「第二世代教師」同士の交流——大学教員懇談会のティータイムで歓談する村上先生（左）と並河一道先生（前号の本欄に同氏のメッセージ）  
( '95.10.7 / 交友館 )

9人のOBたちはいま40歳を越え、それぞれの領域で中堅として活躍中である。毎夏の合宿では仲間の近況報告に接することで相互に啓発し合い、それが新たな活力源になるのだという。恩師を囲むこの定例の再会の集いは、これからもハウスと共に年輪を加えて行くことであろう。

●当時「学生」いま「教師」として  
「あの日のこの思いを、学生たちに伝えたい」——かつてこの丘で学生としてゼミナールを体験した方々が、いま教師として学生たちと合宿をする。これら

んで、ユニット・ハウスのセミナー室には、青春時代だけに経験することが許される、あの独得な充実感に満ちた時間が流れていた。折しも接近中だった台風のために、戸外の雨は刻一刻と激しさを増していたはずだが、それを気に留める者もいなかった。翌朝、睡眠不足の眼に、初秋の抜けるような青空がまぶしく拡がった。そしてセミナー室の前には、前夜の強風で幹を折られた立ち木が一本。私たちは、その木が倒れる音にも気づかず、議論に熱中していた。

同じ年の五月には、戦後二十七年目にして沖縄の施政権が返還され、合宿当日から二週間も経たぬうちに日中国交正常化が伝えられた。あの衝撃的なローマクラブの報告書「成長の限界」が刊行されたのも、この年だった。歴史の大きなうねりと、そのなかで生きるべき道を模索していた小さな自分と——。あれから四半世紀近い時が流れ、セミナー・ハウスも三十周年を迎えたという。この間、どれだけ多くの学生たちが、この丘であの日の私たちと同じような思いを共有してきたことだろう。「セミナー・ハウス第二世代」の教師として、その思いを継承していきたい。

「ハウス第二世代」の教師に出会うことが少なくなる。津田塾大学英文学科の村上健先生のハウス初体験は72年の秋。四半世紀も前のことになる。折からの台風を気に留めることもなく議論に熱中していた、とその日の印象を語って下さる。その村上先生がご自分のゼミの学生を連れて戻って来られてから、もう10年になる。その間、英文学科のフレッシュマン・キャンプでも来泊され、そしてハウス30周年の秋には大学教員懇談会に発題者として参加された。「第二世代」からさらに「第三世代」へ——村上先生の思いもまた受け継がれて行くことであろう。

# 利用状況

95年9月～11月  
 ＊11月2回利用  
 ＊＊11月4回利用  
 ＊＊＊11月4回利用  
 日帰りを除く

利用状況	9月(107グループ、延五、五六三一人)	10月(70グループ、延三、六六一一人)	11月(70グループ、延二、五二八一人)
大妻女子大学	大妻女子大学助教授 大野 清志	東京工科大学講師 大山 恭弘	千葉大学薬学部茶道部 住沢 博紀
中央大学	中央大学助教授 奥田 泰弘	大東文化大学助教授 中道 知子	日本女子大学助教授 林 正樹
法政大学	法政大学講師 菅沢 龍文	八千代国際大学助教授 山口 桂子	中央大学助教授 室本 誠二
東海大学	東海大学助教授 大塚 滋	流通経済大学助教授 大塚 祥保	東京大学助教授 寺田 実
上智大学	上智大学助教授 小川 捷之	産能大学助教授 根来 龍之	東京大学助教授 根来 龍之
立教大学	立教大学助教授 北岡 伸一	創価大学助教授 村松 司叙	東京大学助教授 中村 一樹
立教大学文学部	立教大学文学部集中合同講義A	創価大学助教授 山口 和子	東京大学助教授 上野 敦男
成蹊大学	成蹊大学助教授 宇野 重昭	FDハンドブック編集合宿	山梨学院大学助教授 上野 敦男
早稲田大学	早稲田大学講師 小沢 有作	支援基礎論研究会	第32回大学教員懇談会
早稲田大学	早稲田大学助教授 深澤 實	インド考古研究会	第167回大学共同セミナー
早稲田大学	早稲田大学助教授 荒木昭次郎	人間関係ワークショップ・リユニオン	弁論研鑽合宿
早稲田大学	早稲田大学助教授 氏家 春生	中樞神経系ベータシットプログラム	合同ワークショップ
早稲田大学	早稲田大学助教授 井出 祥子	関東近世史研究会	くにたち市民オーケストラ
早稲田大学	早稲田大学助教授 播 里枝	フランス語応用普及協会	基督教児童福祉会
早稲田大学	早稲田大学助教授 横山 久	マックス・ヴェーバー「ロシア革命論」研究会	数学工房
早稲田大学	早稲田大学助教授 奥田 英信	第10回大学教員研修プログラム	日本レクリエーション協会
早稲田大学	早稲田大学助教授 山本 恒	信濃町教会	日本ネイチャーゲーム協会
早稲田大学	早稲田大学助教授 山下 賢一	東京ふれあい教育研究所	多摩学生カウンスリング研究会
早稲田大学	早稲田大学助教授 尾畑 裕	ひのうたごえサークルかなカナ	イエス・キリスト教会三田教会
早稲田大学	早稲田大学助教授 森藤 一男	アンテオケ東京教会	国際教育交流協会
早稲田大学	早稲田大学助教授 飯田 和人	山村教室	東京都レクリエーション協会
早稲田大学	早稲田大学助教授 日暮 聖	形態形成研究会	アジア経済研究会
早稲田大学	早稲田大学助教授 橋爪大三郎	めじろ台シオンチャペル	新日本建築家協会関東甲信越支部
早稲田大学	早稲田大学助教授 浦田 早苗	R・シユタイナー治療教育研究会	日本司法書士会連合会／富士電機テ
早稲田大学	早稲田大学助教授 柴川 林也	共立建設／東芝府中協力会／日本司法書士会連合会＊ ＊ ＊／ケンウッド	クノエンジニアリング／カシオ計算
早稲田大学	早稲田大学助教授 伊藤 孝	大成火災海上保険	機／日立製作所中央研究所／ファイ
早稲田大学	早稲田大学助教授 上智大学キリスト者学生会	〔個人利用〕	ンテック／日産クレジット／共立建
早稲田大学	早稲田大学助教授 杏林学園職員研修	ラトロベ大学講師	設／東京ゲシユタルト研究所
早稲田大学	早稲田大学助教授 東京大学助教授 内宮 博文	ケン・グリーンウッド	上智大学学生
早稲田大学	早稲田大学助教授 東京理科大学助教授 狩野 紀昭	コネクションズ ベス・シェパード	船津 抛子
早稲田大学	早稲田大学助教授 都留文科大助教授 和田 明子	NCB英会話教習所 西川 穂	
早稲田大学	早稲田大学助教授 玉川大学助教授 田中 宏	〔10月(70グループ、延三、六六一一人)〕	
早稲田大学	早稲田大学助教授 明海大学助教授 高山 隆子	一橋大学助教授 梶田 孝道	
早稲田大学	早稲田大学助教授 八千代国際大助教授 角田 史幸	一橋大学助教授 梶田 孝道	
早稲田大学	早稲田大学助教授 明海大学助教授 角田 史幸	一橋大学助教授 梶田 孝道	
早稲田大学	早稲田大学助教授 八千代国際大助教授 角田 史幸	一橋大学助教授 梶田 孝道	

開催予告

●第15回大学院共同セミナー●

ゲーム理論の新しい展開

1996年7月5～7日(金～日、2泊3日)

定員:約40名 申込締切:6月21日(金)

最近、ゲーム理論がおもしろくなってきた。数理経済学、数理社会学、行動生態学、情報・数理科学、社会心理学の分野でゲーム理論を展開されている第一人者と「おもしろくなってきたこと」を存分に語り合いながら、今後の「もっとおもしろくなる」方向を探求してみたい。

◆主題解題

東京大学教育学部教授 佐伯 胖氏

◆講義と演習指導

A. 社会的マッチングの現実と理論

群馬大学社会情報学部助教 富山 慶典氏

B. 生まれ変わったゲーム理論

東京大学経済学部助教 神取 道宏氏

C. 動物行動の進化におけるゲーム的状況とその解決

専修大学法学部教授 長谷川真理子氏

D. 包括適応度と進化的安定戦略—最近の展開—

京都大学生態学研究センター教授 山村 則男氏

E. 社会的ジレンマ研究の新しい動向

北海道大学文学部教授 山岸 俊男氏

◆運営委員

東京大学教育学部教授 佐伯 胖氏

専修大学法学部教授 長谷川真理子氏

大妻女子大学社会情報学部教授 野崎 昭弘氏

●第12回大学教員研修プログラム●

「知」の感動を授業で創る

1996年9月21～22日(土～日、1泊2日)

定員:50名 申込締切:9月10日(火)

大衆化した大学には、「私語」問題に象徴される「学びの場」の危機ともいえるような「状況」が生まれています。「やる気」に欠け、従来型の体系だった学習習慣のない高校卒業生が入学してくるとしたら、大学教員はそれにどう対応すればよいのでしょうか。今日の学生の現状を見つめ、学生にとっても教員にとっても、大学として「知」の感動の味あえる場をどう創りあげるかをめぐって討論します。

◆講演

「璞(あらたま)」の魅力—これからの学生

東京学芸大学教育学部教授 宮腰 賢氏

◆提題

A. 私語問題を考える—授業改善の契機として—

武庫川女子大学教育研究所助教 島田 博司氏

B. 多人数教育と「知」の感動の可能性

中央大学商学部教授 建部 正義氏

C. 「私語なき授業」のための5カ条

立教大学経済学部助教 山口 義行氏

D. パークレー校から学ぶ授業改善と評価システム

東海大学理学部教授 安岡 高志氏

●問い合わせ先

大学セミナー・ハウス企画室

TEL 0426-76-8532 FAX 0426-76-0266

学習院大学教授 飯島 孝夫  
法政大学講師 井口 克己  
東京大学教授 似田貝香門  
東京外国語大学助教 麻田 豊  
東洋英和女学院大学教授 逸見 謙三  
中央大学教授 今川 健  
明星大学教授 井村 君江  
中央大学助教 斎藤 叫  
明治大学教授 長谷川昭彦  
中央大学教授 金原 左門  
桜美林大学教授 岩城 淳子  
東京理科大学教授 狩野 紀昭  
中央大学教授 栗林 世  
東京学芸大学教授 原 聡介  
駒沢大学教授 小林 英夫

永瀬 順弘  
桜美林大学教授 早稲田大学専門学校スケッチゼミ  
早稲田大学教授 島園 進  
桜美林大学教授 井上 雍雄  
桜美林大学教授 大野 和  
早稲田大学教授 浦野 正樹  
東京電機大学教授 八木澤壮一  
一橋大学教授 石 弘光  
東京都立大学生物学ゼミ1・2年  
東京都立大学生物学ゼミ3・4年  
慶応義塾大学助教 西村 義人  
中央大学教授 今 まど子  
東京電機大学教授 西山 康雄  
日本女子大学附属高等学校 上野 敦男  
山梨学院大学教授\* 東 啓  
東京神学大学全学修養会

武蔵野美術大学教授 立花 直美  
石巻専修大学助教 芳賀 信幸  
東洋大学助教 紀 葉子  
バイオマテリアル若手研究会  
日本ルイス・キャロル協会  
首都圏ファンタジックグループ研究会  
第22回国際学生ゼミナール  
ウエスレアン・ホーリネス淀橋教会  
多摩ニュータウン・キリスト教会  
東京ふれあい教育研究所  
心理科学研究会  
日本精神科看護技術協会  
キリストの教会伝道学院  
開発教育協議会  
東京からだところの会  
ルソール合奏団

和尚イア・ネオ・サニヤス・コミュニオン  
日本・パキスタン協会  
日本ヒンドウークシユ・カラコルム研究会  
日本司法書士会連合会/船井総合研究所/共立建設/日本レダリー/ムービング\*/エム・エス計算センター/カシオ計算機/ヒューマンライフセンター/日本ビー・オー・ビー広告協会/シー・ビー・シー総研  
〔個人利用〕  
東京都立科学技術大学客員教授  
V研究会  
F・D・フィッシュャー  
吉本 昌司

武蔵野美術大学教授 立花 直美  
石巻専修大学助教 芳賀 信幸  
東洋大学助教 紀 葉子  
バイオマテリアル若手研究会  
日本ルイス・キャロル協会  
首都圏ファンタジックグループ研究会  
第22回国際学生ゼミナール  
ウエスレアン・ホーリネス淀橋教会  
多摩ニュータウン・キリスト教会  
東京ふれあい教育研究所  
心理科学研究会  
日本精神科看護技術協会  
キリストの教会伝道学院  
開発教育協議会  
東京からだところの会  
ルソール合奏団

武蔵野美術大学教授 立花 直美  
石巻専修大学助教 芳賀 信幸  
東洋大学助教 紀 葉子  
バイオマテリアル若手研究会  
日本ルイス・キャロル協会  
首都圏ファンタジックグループ研究会  
第22回国際学生ゼミナール  
ウエスレアン・ホーリネス淀橋教会  
多摩ニュータウン・キリスト教会  
東京ふれあい教育研究所  
心理科学研究会  
日本精神科看護技術協会  
キリストの教会伝道学院  
開発教育協議会  
東京からだところの会  
ルソール合奏団

武蔵野美術大学教授 立花 直美  
石巻専修大学助教 芳賀 信幸  
東洋大学助教 紀 葉子  
バイオマテリアル若手研究会  
日本ルイス・キャロル協会  
首都圏ファンタジックグループ研究会  
第22回国際学生ゼミナール  
ウエスレアン・ホーリネス淀橋教会  
多摩ニュータウン・キリスト教会  
東京ふれあい教育研究所  
心理科学研究会  
日本精神科看護技術協会  
キリストの教会伝道学院  
開発教育協議会  
東京からだところの会  
ルソール合奏団

武蔵野美術大学教授 立花 直美  
石巻専修大学助教 芳賀 信幸  
東洋大学助教 紀 葉子  
バイオマテリアル若手研究会  
日本ルイス・キャロル協会  
首都圏ファンタジックグループ研究会  
第22回国際学生ゼミナール  
ウエスレアン・ホーリネス淀橋教会  
多摩ニュータウン・キリスト教会  
東京ふれあい教育研究所  
心理科学研究会  
日本精神科看護技術協会  
キリストの教会伝道学院  
開発教育協議会  
東京からだところの会  
ルソール合奏団

武蔵野美術大学教授 立花 直美  
石巻専修大学助教 芳賀 信幸  
東洋大学助教 紀 葉子  
バイオマテリアル若手研究会  
日本ルイス・キャロル協会  
首都圏ファンタジックグループ研究会  
第22回国際学生ゼミナール  
ウエスレアン・ホーリネス淀橋教会  
多摩ニュータウン・キリスト教会  
東京ふれあい教育研究所  
心理科学研究会  
日本精神科看護技術協会  
キリストの教会伝道学院  
開発教育協議会  
東京からだところの会  
ルソール合奏団

武蔵野美術大学教授 立花 直美  
石巻専修大学助教 芳賀 信幸  
東洋大学助教 紀 葉子  
バイオマテリアル若手研究会  
日本ルイス・キャロル協会  
首都圏ファンタジックグループ研究会  
第22回国際学生ゼミナール  
ウエスレアン・ホーリネス淀橋教会  
多摩ニュータウン・キリスト教会  
東京ふれあい教育研究所  
心理科学研究会  
日本精神科看護技術協会  
キリストの教会伝道学院  
開発教育協議会  
東京からだところの会  
ルソール合奏団

武蔵野美術大学教授 立花 直美  
石巻専修大学助教 芳賀 信幸  
東洋大学助教 紀 葉子  
バイオマテリアル若手研究会  
日本ルイス・キャロル協会  
首都圏ファンタジックグループ研究会  
第22回国際学生ゼミナール  
ウエスレアン・ホーリネス淀橋教会  
多摩ニュータウン・キリスト教会  
東京ふれあい教育研究所  
心理科学研究会  
日本精神科看護技術協会  
キリストの教会伝道学院  
開発教育協議会  
東京からだところの会  
ルソール合奏団

武蔵野美術大学教授 立花 直美  
石巻専修大学助教 芳賀 信幸  
東洋大学助教 紀 葉子  
バイオマテリアル若手研究会  
日本ルイス・キャロル協会  
首都圏ファンタジックグループ研究会  
第22回国際学生ゼミナール  
ウエスレアン・ホーリネス淀橋教会  
多摩ニュータウン・キリスト教会  
東京ふれあい教育研究所  
心理科学研究会  
日本精神科看護技術協会  
キリストの教会伝道学院  
開発教育協議会  
東京からだところの会  
ルソール合奏団

武蔵野美術大学教授 立花 直美  
石巻専修大学助教 芳賀 信幸  
東洋大学助教 紀 葉子  
バイオマテリアル若手研究会  
日本ルイス・キャロル協会  
首都圏ファンタジックグループ研究会  
第22回国際学生ゼミナール  
ウエスレアン・ホーリネス淀橋教会  
多摩ニュータウン・キリスト教会  
東京ふれあい教育研究所  
心理科学研究会  
日本精神科看護技術協会  
キリストの教会伝道学院  
開発教育協議会  
東京からだところの会  
ルソール合奏団

武蔵野美術大学教授 立花 直美  
石巻専修大学助教 芳賀 信幸  
東洋大学助教 紀 葉子  
バイオマテリアル若手研究会  
日本ルイス・キャロル協会  
首都圏ファンタジックグループ研究会  
第22回国際学生ゼミナール  
ウエスレアン・ホーリネス淀橋教会  
多摩ニュータウン・キリスト教会  
東京ふれあい教育研究所  
心理科学研究会  
日本精神科看護技術協会  
キリストの教会伝道学院  
開発教育協議会  
東京からだところの会  
ルソール合奏団

武蔵野美術大学教授 立花 直美  
石巻専修大学助教 芳賀 信幸  
東洋大学助教 紀 葉子  
バイオマテリアル若手研究会  
日本ルイス・キャロル協会  
首都圏ファンタジックグループ研究会  
第22回国際学生ゼミナール  
ウエスレアン・ホーリネス淀橋教会  
多摩ニュータウン・キリスト教会  
東京ふれあい教育研究所  
心理科学研究会  
日本精神科看護技術協会  
キリストの教会伝道学院  
開発教育協議会  
東京からだところの会  
ルソール合奏団

武蔵野美術大学教授 立花 直美  
石巻専修大学助教 芳賀 信幸  
東洋大学助教 紀 葉子  
バイオマテリアル若手研究会  
日本ルイス・キャロル協会  
首都圏ファンタジックグループ研究会  
第22回国際学生ゼミナール  
ウエスレアン・ホーリネス淀橋教会  
多摩ニュータウン・キリスト教会  
東京ふれあい教育研究所  
心理科学研究会  
日本精神科看護技術協会  
キリストの教会伝道学院  
開発教育協議会  
東京からだところの会  
ルソール合奏団

武蔵野美術大学教授 立花 直美  
石巻専修大学助教 芳賀 信幸  
東洋大学助教 紀 葉子  
バイオマテリアル若手研究会  
日本ルイス・キャロル協会  
首都圏ファンタジックグループ研究会  
第22回国際学生ゼミナール  
ウエスレアン・ホーリネス淀橋教会  
多摩ニュータウン・キリスト教会  
東京ふれあい教育研究所  
心理科学研究会  
日本精神科看護技術協会  
キリストの教会伝道学院  
開発教育協議会  
東京からだところの会  
ルソール合奏団

●館長室から●

花冷え続きが幸いしてか長く目を  
楽しませてくれた枝垂桜でしたが、  
アツという間に緑に変身。若緑一色  
の構内は、例年通り新入生で溢れ  
返っています。

この号、教員研修、教員懇談会、  
共同セミナー、そして国際セミナー  
と、ご報告は盛り沢山。いささか  
ギュー詰感のある編集となりました  
点、ご容赦下さい。

ところで、前号に続く30周年記念  
特集記事、「当時学生、今は教師とし  
て」や、20年の間毎年のゼミが今も  
続いている「八王子建築ゼミ」「卒業  
20年、定例の再会合宿」など、お目  
にとまったことと思います。

それぞれ「ここに来れば、また出  
会うことができる」の思いを、その  
まま、セミナー・ハウスの心の風土  
を作りつつ、共に歩んできて下さっ  
た方々の、サラリと洩らされる感想  
は、改めて大きく身に沁みます。

さて、記念の集いの後、長年にお  
たり当ハウス活動の牽引車の役割を  
果たした下さった中川秀恭先生から  
佐野博敏先生へとバトンが渡されま  
した。ハウスの活動の新展開も、新  
理事長のメッセージ「多臓器不全寸  
前の教育問題に、画餅ならぬ実践を  
……」の通り、かけ声だけに終わら  
せない実りあるものにと、職員共々  
懸命の日々です。

(岡)

表紙の写真はスケッチ・ゼミ最終  
日、野外ステージで「ハウスの建  
築」の写真を発表し合う早大専門  
学校建築学科の学生たち

セミナー・ハウス

1996年5月25日発行(年4回)  
第141号

発行=財団法人 大学セミナー・ハウス

〒192-03 東京都八王子市下柚木1987  
TEL0426-76-8511 FAX0426-76-1220  
振替口座 00150-1-74590

発行人=岡 安子  
編集=大学セミナー・ハウス企画室  
制作=中央公論事業出版

SEMINAR HOUSE  
The Quarterly Journal of Inter-University Seminar House  
1996, No.141